

ラブレーの『第三の書』における「地獄下り」の下層図式

折 井 穂 積

ラブレーの作品における「地獄下り」のテーマに関しては、『パンタグリユエル』に見られるエピステモンの地獄下りのエピソードが有名である。では『第三の書』についてはどうだろうか。確かにこの作品には地獄や悪魔に関する表現が頻出するし、パニユルジュが悪魔にさらわれるための方法を論じる場面もある。しかし実際に登場人物が地獄下りをするような場面は『第三の書』には全く出てこない。そのため「悪魔」というテーマからこの作品を分析しようとする研究者はいるが、「地獄」という場所の果たす役割に注目した研究は未だ存在しない。では『第三の書』と「地獄下り」とは無関係なのだろうか。

周知の通り、この作品はパニユルジュの二つの問題を巡って話が進行する。それらは、結婚すべきか否か、結婚したら浮気されるのではないか、という問題である。パニユルジュは、前半では幾つかの占いを繰り返し、後半では知識人たちの助言を求め、この問題を解決しようとする。このため『第三の書』はいわば「知の探索」といった趣を呈する。さて、問題の悪魔に関する表現は、前半部から中央部にかけての占いに関する部分に多く見られる。実際、ウェルギリウス占い、夢占い、巫女シビュルラの占い、聾啞者ナズドカーブルの身振り占いの各エピソードには、悪魔の影が見え隠れする。さらにこの傾向は中央部に近づくにつれて次第に顕著となっていく。死にかけた詩人ラミナグロビスによる占いのエピソードには、悪魔に魂をさらわれる話が見られ、オカルト学者ヘル・トリッパは、極めて悪魔的要素の強い占術であるネクロマンシーを行なうことさえ提案する。

そこで我々は次の仮定をしたい。ラブレーはこの作品の前半部を創作する際に、「地獄下り」を念頭に置いていたのではないだろうか。さらに言うならば、ラブレーは、パニユルジュの「探索」と「地獄下り」とを重ね合わせたのではないだろうか。本論では、この仮定に基き、前半部と中央部における「地獄下り」を暗示する表現を分析していくことにする。

借金皆済

地獄に関するまとまった記述が最初に表れるのは借金礼讃においてである。へそ曲がりのパニユルジュは、自らの借金を正当化しようと、いかに借金することが素晴らしいかを長々と述べる。彼によると、貸し借りする行為こそ慈悲の心の現れだ。そう考えると、借金のない世界はま

さに地獄であり、逆に誰もが債権者であり債務者である世界は、まだ私有財産にこだわることのなかった原始の黄金時代に比較される。ここで注意したいのは、本来ならば借金のない世界こそが天国に譬えられ、逆に借金に支配された世界こそが地獄に譬えられるべきである、という点である¹⁾。パニユルジュの借金礼讃においては、価値観が逆転し、その結果、天国と地獄は互いの位置を入れ替えている。従って、彼の憧れはサトゥルヌスが統治する黄金時代に向かうように見えて、実は地獄に向かっているのだ、と言えよう。実際、サトゥルヌスはユピテルによって地獄の底タルタロスに落とされるのだから、逆説的礼讃を客観的に眺めるならば、サトゥルヌスは黄金時代よりもむしろ地獄の底を想起させるのだ。

また、パニユルジュは、借金のない世界では人体内部の諸機関も運動を停止し即座に死に至る、と主張した後、次のように述べる。「*l'ame toute indignée prendra course à tous les Diables, apres mon argent [TL 3, 120].*」この台詞は、実はパニユルジュの「地獄下り」を暗示するために置かれた一種の伏線となっていることが予想される。なぜならば、実際に主君パンタグリユエルはパニユルジュの借金を帳消しにしてやるからだ。パニユルジュは借金の元金だけは残しておいて欲しいとパンタグリユエルに頼み、そこで借金礼讃は終わるが、後の文脈からも、ここでパニユルジュの全ての借金が帳消しにされたことがわかる。さらに第23章ではパニユルジュ自身、悪魔と借金の関係について次のように述べている。

Secondement, sois quitte. Car les Diables aiment fort les quittes. Je le sçay bien quant est de moy : les paillars en cessent de muguer, et me faire la court, ce que ne souloient estant safrané et endebté. L'ame d'un homme endebté est toute hecticque et discrasiee. Ce n'est viande à Diables. [TL 23, 66]

彼自身の理屈によれば、借金皆済になったパニユルジュには、悪魔にさらわれる可能性が十分にあるわけだ。だからこそ、彼は悪魔にさらわれる心配を口にする。

Qui sçait s'ilz useroient de qui pro quo, et en lieu de Raminagrobis grupperoient le paouvre Panurge quitte? Ilz y ont maintes foys failly estant safrané et endebté [TL 23, 20].

以上のように、仮に『第三の書』に「地獄下り」の下層図式があるとするならば、借金礼讃はこの図式を準備している、と考えられる。つまり、この逆説的礼讃は、これから始まるパニユルジュの「探索」が「地獄下り」となることを予告しているのではないだろうか。

「悪魔の国」

次に注目したいのは、パニユルジュがウェルギリウス占いをする前にサイコロを振るシーンである。三つのサイコロの目の合計は十六であり、これについてパニユルジュとパンタグリユエル

は次のような会話を交わす。

Le nombre me plaist, et croy que nos rencontres seront heureuses. Je me donne à travers tous les Diables, comme un coup de boulle à travers un jeu de quilles ou comme un coup de canon à travers un bataillon de gens de pied : guare Diables qui voudra, en cas que autant de foys je ne belute ma femme future la premiere nuyct de mes nopces.

— Je ne en fays doubte (respondit Pantagruel), ja besoing n'estoit en faire si horrificque devotion. [TL 11, 25]

これは一見何気ない会話のように思える。しかし、仮にラブレーが作品の下層に「地獄下り」を隠していたとしたら、この会話は非常に重要な意味を帯びてくる。パニユルジュは自らが気づかないうちに地獄に下りつつあるのに、悪魔たちの中に突進してもよい、などと口先だけの勇ましい言葉を口にしていることになるからだ。ここには彼特有の盲目ぶりが現れているのではないか。パニユルジュの台詞は常に裏を読む必要があり、例えば彼が他人を批判する時、実は批判されるべきなのは自分自身である。これはラブレーの典型的な手法とも言えよう。これと同じく、彼の空威張りは読者には見え透いている。引用した会話は、オカルト的なものに好奇心を惹かれるパニユルジュが、既にそれとは気づかぬうちに悪魔へ身を捧げつつあることを読者に暗示していると考えられる。

また、この数行前にメルリヌス・コッカイウスの『悪魔の国』という書名が出てくる。これは恐らく偶然ではない。このパニユルジュがサイコロを振る場面は、いよいよ彼が最初の占いを始める、本書の極めて重要な箇所である。『第三の書』には二箇所「誹謗者悪魔」という本書の理解に欠かせない言葉が出てくるが、そのひとつがこの部分である。

Le mauldict livre du passe temps des dez feut, long temps a, inventé par le calumniateur ennemy en Achaïe près Boure : et davant la statue de Hercules Bouraïque y faisoit jadis, de praesent en plusieurs lieux faict, maintes simples ames errer et en ses lazcz tomber. [...] Ce que des dez je vous ay dict, je diz semblablement des tales. C'est sort de pareil abus. [...] Ce sont hamessons par les quelz le calumniateur tire les simples ames à perdition eternelle. [TL 11, 4]

ここではサイコロ占いが悪魔の甘い誘惑であり、破滅への道であることが述べられている。そしてこの台詞の直後に、『悪魔の国』という書物の名が出され、その後、パニユルジュはサイコロを振る。こうして見ると、パンタグリュエルの言うように、彼はまさに誹謗者悪魔の陥穽にかかってしまったのではないだろうか。すると、占いを始めることによって、彼はまさに「悪魔の国」、即ち地獄へと向かっているのだ、と言えよう。

地獄の首吊り台

ウェルギリウス占いにおいてはパンタグリュエルとパニユルジュの解釈が一致せず、次に彼らは夢による占いを試みる。パニユルジュの夢に対するパンタグリュエルの解釈は単純である。パニユルジュはコキユになり、殴られ、盗まれるであろう。パニユルジュはこれに反論し、自分に都合のよい解釈を長々と述べる。その最後に彼はノエルの歌を引用して、自分の解釈を信じない奴は地獄の首吊り台へ行くがいい(« Qui ne le croid, d'enfer aille au gibbet. »), と述べる。パニユルジュが地獄に下りつつあること、そして本人はそれに全く気づいていないことを想定して読むことによって始めて、我々はこの台詞の面白さが理解できる。『第三の書』は実に緻密な計算に基づいて構成されている。地獄に下っているパニユルジュが皮肉にも相手に向かって地獄に落ちるぞ、と言う。ここには、例によって、パニユルジュの盲目ぶりが露呈しているのであり、そのためにこそラブレーはノエルの歌の一節をパニユルジュに引用させたのだ。

なお、パニユルジュが引用しているノエルの歌は15世紀末のものである。パニユルジュが借用している一節は次のようなものである。

frere creis tu icy?
Si tu y crois es cieux seras ravy,
Si tu n'y crois d'enfer va au gibet²⁾.

このように原曲の歌詞では、天国と地獄とが対置されている。ラブレーが「地獄」を自らの作品の下層トposとして組み込もうと計画していたとしたら、天国行きと地獄落ちの対置されたこの歌の歌詞が彼の関心を引いたのは自然なことである。

ケルベロス

夢占いを終えた後のパニユルジュの次の台詞を見てみよう。彼は夢占いをするために前夜夕食を殆ど取らなかったため、非常な空腹を感じている。夕食を抜くことなどスキャンダルだ、とぶつぶつ不平を並べた後、パニユルジュはこう言う。

Mon stomach abboye de male faim comme un Chien. Jectons luy force soupes en gueule
pour l'appaiser : à l'exemple de la Sibylle envers Cerberus. [TL 15, 31]

彼は何の気もなしに自分の胃をケルベロスに譬えたのかもしれない。読者もついうっかりと読み過ぎてしまいそうになる。しかし彼が地獄に下りつつあることを証明しようとしている我々にとっては、これもまた見逃せない台詞である。ここには地獄という言葉は出てこないが、ケルベロスは冥界の入口を守る猛犬であるから、これが地獄を想起させることは言うまでもない。そしてパニユルジュの言及しているシビュルラの行為は、明らかに『アエネイス』の地獄下りの逸話を前提にしている。シビュルラはケルベロスに「蜜と薬剤入りの穀物で作られた催眠の菓子」を

投げ与え、これを眠らせて地獄に入っていく。「こうして番犬を眠りに埋め、アエネアスは、この入口を自由にし、再び帰る人のない川岸よりいそぎ入る (v.417-425)。」つまり、シビュルラがケルベロスに食べ物を与える、という表現は、これから冥界に入る、ということを意味するのである。ラブレーはなぜこのような意味を持つ台詞をパニユルジュに与えたのだろうか。彼には自らの作品の下層に「地獄下り」の図式を隠そうとする意図があったのだ、と考えるならば、確かにこの事実はいまよく説明される。

シビュルラの穴

最初の占いがウェルギリウス占いであることや、先のシビュルラとケルベロスへの言及など、アエネアスの地獄下りを想起させる部分は数多くあるが、次のシビュルラの占いについても同様である。ここには単にシビュルラが出てくるというだけではなく、アエネアスが地獄下りの際に持参した有名な「黄金の小枝」についてさえ言及されている。

« Verd et bleu (dist Epistemon) nous avons failly. Nous ne aurons d'elle responce aulcune, car nous n'avons le rameau d'or.

— Je y ay (respondit Panurge) pourveu. Je l'ay ici dedans ma gibbesierre en une verge d'or acompaigné de beaulx et joyeux carolus. » [TL 17, 19]

また、シビュルラの巫女の風貌、その予言の方法は、明らかに魔女と魔女の使う妖術を想起させる。そしてそれはパニユルジュ自身の印象でもある。

Par la vertus Dieu, je tremble, je croy que je suys charmé, elle ne parle point Christian.
[...] Les aureilles me cornent ; il m'est advis que je oy Proserpine bruyante ; les Diables bien toust en place sortiront. O les laydes bestes. Fuyons. Serpe Dieu je meurs de paour.
Je n'ayme point les diables. Ilz me faschent et sont mal plaisans. Fuyons. [TL 17, 49]

シビュルラの所へ行く前に、パニユルジュはサージュ・ファムとプレサージュ・ファムの洒落を使っているが、これは産婆が当時魔女と見られることもあったという文脈に則って書かれている。エピステモンもシビュルラが魔術や妖術を使うのではないかと恐れている。このように、ラブレーはこのエピソードを書く際に、明らかに魔女と妖術を意識していた。このことは直ちに地獄下りと結びつきはしないが、それまでの二つの占いと比べてパニユルジュが悪魔の近くに来ているという印象を与える。

さらに、シビュルラは占いの後、服を捲り上げて尻を見せる。このいささか唐突な行為は何を意味するのだろうか。パニユルジュはこれを見てエピステモンに言う。「あれがシビュルラの穴だぜ。」コトグレーヴにもあるとおり、「シビュルラの穴」とは、当時、「肛門」を意味する卑語であった。では、ラブレーは単に読者を笑わせるために下品な洒落を使っただけなのだろう

か。確かに研究者たちはこのエピソードに特別な意味があるとは考えていない。だがここで我々は、この言葉が同時に「地獄の入口」をも意味していた、という事実注目したい。中世の伝説では、ヨーロッパの各所にこうした穴があり、これらは煉獄や地獄の入口と考えられていたという³⁾。有名なのは聖パトリックの洞穴であり、これは煉獄の入口と考えられており、多くの巡礼者がここを訪れた。『ガルガンチュア』第2章に「聖パトリックの洞穴の物語、ジブラルタル、また百千の洞窟の話」という表現が出てくるが、このジブラルタルもまた「シビュルラの穴」と呼ばれていた。つまり、この表現は、一方で肛門を表す隠語であると共に、地獄の入口のことであったのだ。従って、ラブレーがこの言葉をパニユルジュに言わせたのもまた、恐らく偶然ではない。ラブレーはこの表現の二重の意味を利用している。まず、テキストの表側では、巫女の尻の穴そのものを指し示す。これ自体がエピソードのシビュルラと「シビュルラの穴」という表現を掛け合わせた洒落になっている。しかしテキストの裏側で、ラブレーはこの表現のもうひとつの意味を巧みに用い、地獄に下るパニユルジュを暗示しているのである。

ダタンとアビラムの地獄落ち

シビュルラの託宣の後は、聾啞者ナズドカーブルの身振りによる占いがくる。パンタグリュエルは聾啞者の占いをパニユルジュに勧める際に、男がいいか女がいいか尋ねる。パニユルジュはこれに答えて、女に関しては二つ心配なことがある、と言う。ひとつは女は何を見ても性的な連想をする、という心配で、もうひとつは、女はこちらの合図に何の返事もしないばかりか、馬鹿馬鹿しい返事しかしない、という心配である。彼はそれぞれに関してひとつずつ例を挙げるが、そのうち後者の例は、修道女フェッシュュに関するものだ。この修道女は尼僧院の寝部屋に男を引き込み、その結果妊娠してしまう。罪を咎められた修道女は、様々な言い訳をする。具体的には尼僧院長の四つの詰問に、四つの言い訳が述べられる。我々はここでその最後の言い訳に注目したい。尼僧院長の最後の質問は、罪を犯した後、なぜそれをすぐに懺悔しなかったか、というものだ。これについてフェッシュュは、彼女と関係を持った当の男に懺悔をした、と言い訳をする。そして懺悔は誰にも漏らしてはならないから今まで黙っていた、というのである。彼女は、もし懺悔を他人に漏らしたら、「ダタンやアビラムの道連れになって奈落の底へ落ちてしまうかもしれません」と言っている。

Par aventure eust ce esté cause que le feu du ciel eust ars toute l'abbaye : et toutes feussions tombées en abisme avecques Dathan et Abiron. [TL 19, 97]

フェッシュュは地獄落ちを免れるために懺悔を他人に漏らしてはならないという規則を重んじたが、このような規則の盲目的遵守は規則の本質から逸脱している。彼女は規則を守ったことにより逆に地獄落ちになるであろう。ここで笑いの対象になっているのは修道女フェッシュュであるが、このアネクドート自体がパニユルジュによって語られるのであるから注意しなければならない。フェッシュュの行動、その言い訳は実はパニユルジュ自身の行動に当てはまるのではないか。実際、

規則の盲目的遵守や迷信に陥っているのは、寧ろパニユルジュ自身ではないか。それに気づかずフェッシュを笑うパニユルジュこそ、二重の意味で笑われるべきではないのか。もしこれらの推測が正しければ、ダタンやアビラム、及び彼らの落ちる奈落の底への言及は、パニユルジュ自身の状況を暗示していると考えられるのではないか。ところでダタンとアビラムの話は民数記に収められている。

モーセは言った。「[……] もし主が新しいことを創始されて、大地が口を開き、彼らと彼らに属するすべてを呑み込み、彼らが生きたまま陰府に落ちるならば [descenderintque viventes in infernum], この者たちが主をないがしろにしたことをあなたがたは知るであろう。」こう語り終えるやいなや、彼らの足もとの大地が裂けた。地は口を開き、彼らとコラの仲間たち、その持ち物一切を、家もろとも呑み込んだ。彼らと彼らに属するものはすべて、生きたまま陰府へ落ち [descenderuntque vivi in infernum], 地がそれを蔽った。彼らはこうして会衆の間から滅び去った。[民数記 16,28-32]

ここには「地獄下り」のテーマが明確に現れている。ダタンやアビラムは単に地に呑み込まれるというだけではなく、「生きたまま地獄に下る」と明記されていることに注意したい。聖書のこの記述は、パニユルジュの「探索」に「地獄下り」を重ね合わせようとしたラブレの関心を引いたに違いない。こうして彼は、尼僧フェッシュのアネクドートの中にも「地獄下り」の図式をこっそりと挿入したのである。

ナズドカーブル

パニユルジュは結局、「山羊の鼻」という意味の名前を持つナズドカーブルという聾啞の男に会うことになる。ここでは、サタンが山羊の姿で現れるという当時の常識も忘れてはならない。例えば、ジャン・ボダンは次のように述べている。

Sathan, qui a de coustume prendre tel corps que bon luy semble, & le plus souuent, & ordinairement, aprez la figure humaine, prend la figure d'un Bouc⁴⁾.

またジャン・セアールは、マルコ伝 (9,25) に「ものも言わせず、耳も聞こえさせない霊、私の命令だ。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな⁵⁾」というイエスの言葉があることを指摘し、ナズドカーブルと悪霊との関係に読者の注意を促している⁶⁾。

地獄の女神プロセルピナ

ナズドカーブルの次に来るのはラミナグロビスのエピソードである。この死にゆく詩人の魂の行く先としては、『地獄』という言葉が出てくるのみならず、その場所や方向がパニユルジュによっ

て具体的に特定される。

Son ame s'en va à trente mile charretées de Diables. Sçavez vous où? Cor Bieu, mon amy, droict dessoubs la scelle persée de Proserpine, dedans le propre bassin infernal on quel elle rend l'operation fecale de ses clysteres, à cousté guausche de la grande chaudiere, à trois toises près les gryphes de Lucifer, tirant vers la chambre noire de Demiourgon. Ho, le villain! [TL 22, 61]

このような場所に関する表現は、作品内に地獄というトポスが存在するという印象を我々に与える。また、ここに言及されているのは単なる地獄ではない。「プロセルピナのおまの真下」というのは、地獄の中の地獄、つまり地獄の最下層なのである。これはタルタロスに他ならない。ホメロスの『イリアス』第八歌冒頭には、タルタロスが次のように定義されている。「ここからは遥かに遠く、そこには地の底に深い仕置坑があり、門は鉄、床は青銅張り、冥府よりさらに下で、冥府との距離は、天と地との距離ほどもある。」

さらに、この記述が近い未来に関する予想であることにも注目したい。このことは、ここで言及されている地獄の底がいよいよ間近に迫っていることを予想させる。第一、パニユルジュはラミナグロビスの魂の地獄落ちについてのみ言及しているわけではない。彼自身、悪魔にさらわれることを極度に恐れている。もし我々の仮説が正しければ、このことは大変に興味深い。パニユルジュは無意識のうちに実行している彼自身の地獄下りについて言及している、ということになるからだ。

ヴェードの浅瀬

ラブレは、ラミナグロビスの魂の地獄落ちだけではなく、パニユルジュ自身の悪魔と地獄への恐怖も描いている。その中で悪魔にさらわれてしまう条件や、悪魔に対する剣の効用が極めて具体的に語られる。悪魔にさらわれてしまう条件としてまず第一に挙げられるのが、貨幣を所持していないことである。逆に悪魔にさらわれないためには貨幣を所持するとよい。その理由は、悪魔が貨幣に刻まれている十字架像を嫌がるためである、と説明される。そしてパニユルジュはヴェードの浅瀬での逸話を紹介する。ある徴税官がこの浅瀬の岸辺で、クスコワルという修道士に背負って渡してもらおうとした。そして、無事に渡してくれるならば、新しい着物を一枚あげようと提案する。修道士はこれを引き受け川を渡りはじめる。しかし、途中でこの徴税官が金を持っていることに気づき、身に金銭を帯びることを禁じた宗門の規則に俺を背かせるつもりか、と怒り背負っていた男を川に落してしまう。パニユルジュは、ジャン修道士に対して、仮にお前が悪魔にさらわれたいとしても、このように金を持っていると、さらわれる途中で振り落とされるぞ、と警告する。この挿話は一体何のためにあるのか、また、パニユルジュの主張は正しいのか、我々は問題にしなければならない。結論から言うと、ヴェードの浅瀬のクスコワル修道士は、三途の川スティクス（或いはアケロン）の渡し守カロンに相当する、というのが我々の推定だ。

これはそれほど突飛な比較ではない。そもそも悪魔にさらわれ地獄に落ちる話の最中に、川を渡る話が置かれているのだ。これが地獄の川を想起させるのは言うまでもない。クスコワルとカロンの双方が、川を渡してやる見返りを要求する。

ただし、ここで問題となるのは、クスコワル修道士が金を嫌っているのに対して、カロンは魂から金を取る、という点だ。カロンはもともとギリシア神話では温和な老人として描かれるが、後にエトルリアの悪魔と同一視されるようになる。確かにカロンは、『アエネイス』第六歌でも恐ろしい姿で描かれている。この貪欲な渡し守には、通行料が必要であった。そのため古代ローマでは、死者を葬る際にその口に通行料を入れるのを慣しとしていたという。こうして見るとクスコワル修道士とカロンは金に対して正反対である。ではヴェードの浅瀬と三途の川の比較は不可能なのだろうか。しかし、二人の好みが正反対であるだけに、ことさら疑ってみる必要がある。つまり、パニユルジュの主張がどこかおかしいことに我々は気づかねばならない。悪魔が好んでさらっていくのは、本当は金を所持している者、さらに言えば金の亡者ではないのか。パニユルジュがジャン修道士にこのような条件を示しながら、パニユルジュは自分では金を離そうとしない。それどころか、ジャン修道士に、お前の財布を俺によこせ、と言う。この話をするだけでパニユルジュは、本気にはないにしろ、あわよくばジャン修道士の財布をせしめてやろう、と考えている。だが、真に悪魔が好むのは、パニユルジュのような人間なのだ。悪魔にさらわれる方法を得意げに解説するパニユルジュ自身が、実は悪魔にさらわれつつあって三途の川を渡っている。こう考えることによって、このエピソードはさらに意義深いものとして浮び上がってくるのである。

ヘラクレス、アエネアス、オデュッセウスの地獄下り

パニユルジュはいくつか悪魔にさらわれてしまう条件を列挙した後で、悪魔に対する剣の効用について力説する。ここでは、アエネアスやヘラクレスの地獄下りの例までが言及されている。

De faict Hercules, descendent en enfer à tous les Diables, ne leurs feist tant de paour ayant seulement sa peau de Lion et sa massue, comme par après feist Aeneas estant couvert d'un harnoy resplendissant, et guarney de son bragmard bien apoint fourby et desrouillé à l'ayde et conseil de la Sibylle Cumane. [TL 23, 82]

つまりここに「地獄下り」のテーマは、非常に明確な形で現れているのだ。

悪魔にさらわれるということは、受動的かつ無意識的な行動であるが、パニユルジュは能動的かつ意識的な地獄下りにも言及している。それがアエネアスやヘラクレスの地獄下りである。つまりここには二種類の「地獄下り」が見られるのだ。この点でパニユルジュが最初にジャン修道士に対し、悪魔にさらわれたいか、と彼の意志を尋ねていることは興味深い。パニユルジュは悪魔にさらわれることを極度に恐れている。しかしながら、彼自身の自己愛が彼を地獄へと導くのであるから、客観的に見ると、彼は自分の責任で地獄に下っていることになる。従ってこのエピソード

ドに、「地獄の探索」（能動的）と「地獄落ち」（受動的）という二種類の「地獄下り」が見られるのは理由のないことではない。パニユルジュの「地獄下り」はそれらの中間に位置する。

さて、ラミナグロビスの地獄落ちについて語られている部分には、間接的な形でオデュッセウスの地獄下りについてさえ言及されている。ラミナグロビスの詩句の曖昧さから、エピステモンは予言者ティレシアスの言葉を思い出す。

— Ainsi (respondit Epistemon) protestoit Tiresias, le grand Vaticinateur, au commencement de toutes ses divinations, disant apertement à ceux qui de luy prenoient avis : « Ce que je diray adviendra ou ne adviendra poinct ». [TL 22, 30]

盲目の予言者ティレシアスは、ホメロスの『オデュッセイア』第十一歌に登場する。オデュッセウスはキルケの助言に従って地獄に下り、ティレシアスの霊に彼の帰国に関する予言を聞く。つまり、ラブレーがこの箇所ティレシアスの名を配置した理由は、オデュッセウスの地獄下りを介してパニユルジュの「地獄下り」を読者に暗示するためであった、と言えるのではないだろうか。その証拠に、ティレシアスの引用の台詞はホラティウスの『風刺詩』第二巻の五『遺産を手に入れる術』から取られたものであることが知られている。この風刺詩は『オデュッセイア』第十一歌 (v.90-149) の続きという設定のパロディである。オデュッセウスに故国イタカに帰って失った財産を奪回する方策を尋ねられた予言者ティレシアスは、他人の遺産をずるがしこく手に入れる方法を伝授する。つまり、ホラティウスから引用されたティレシアスの台詞は、地獄に下ったオデュッセウスに対して語られた言葉なのだ。

ところでティレシアスに関しては、もう一つ有名なエピソードがある。オウィディウスの『変身物語』第三巻によると、ティレシアスは男性と女性の両方の性を経験したという。そこで、ユピテルとユノーが男性と女性のどちらが性交時の快楽が大きいか口論したときに、彼は意見を問われる。ここで女性の快楽の方が大きいと証言したために、ユノーは気を悪くして彼を罰し、彼の目を永遠の闇でおおった。その代わりにユピテルは彼に予知能力を与えたという。この話はパニユルジュとエピステモンの会話にも出てくる。

— Toutesfoys (dist Panurge) Juno luy creva les deux œilz.

— Voyre (respondit Epistemon) par despit de ce que il avoit mieulx sentié que elle sus le doubte propousé par Juppiter. [TL 22, 35]

このようにティレシアスは男女両性の体験者という特殊な存在であり、ティレシアスの名から直ちにこの特殊性が想起されがちである。実際にエピステモンとパニユルジュも、ティレシアスの予言のことを話しながら、いつのまにか話がそちらに逸脱している。恐らくラブレーはオデュッセウスの地獄下りをテキストの裏側に隠そうとした。そこで故意にこのことには全く触れず、その代わりに、ティレシアスに関するもう一つの有名なアネクドットを登場人物に話させた。この特

殊なアネクドートに登場人物も読者も目を奪われてしまう。これがラブレーの手法の面白い点である。彼は登場人物と共に読者も罠に嵌めてしまう。読者は、ティレシアスの名が真に暗示するのはオデュッセウスの地獄下りであり、さらにはパニユルジュの「地獄下り」なのだと気づかなくはない。

オーギュギエ島のサトゥルヌス

ラミナグロビスのエピソードとヘルトリッパのエピソードの間には、サトゥルヌスの名が登場する。パニユルジュはオーギュギエ諸島までサトゥルヌスの神託を授かりに行こうと提案するのだ。そこでは、この神が黄金の巖に黄金の鎖で縛められアンブロジーと聖なるネクタルとで養われているという。パニユルジュは幻想によって期待をふくらませている。ここでサトゥルヌスが二つの矛盾する側面を持ち合わせていることを思い出したい。一方で彼の黄金時代は原始の幸福を象徴する。パニユルジュ自身、借金礼讃の中でこの考えを発展させ、誰もが債権者であり債務者である理想の世界をサトゥルヌスの御代に譬えている。だが、もう一方でこの神は、父親のウラノスを鎌で去勢して王位につき、王位の篡奪を恐れて息子たちを食ってしまうという不吉な側面も併せ持っている。土星は最も冷たく、乾いた、遅い遊星として、サトゥルヌスやメランコリー気質と結び付られていく。十六世紀には、サトゥルヌスの不吉な側面は、土星の支配を受けるとされる「土星の子供たち」にも当てはまるものと見なされていた。この中には、囚人、不具者、乞食ばかりでなく、魔法使いや妖術師も含まれている。実際、パニユルジュは、サトゥルヌスの縛められているオーギュギエ島には、何人もの「売卜者占い師予言者」が住んでいると言っている。ヘル・トリッパもまた土星の子の一人である。従って、ラブレーがここにサトゥルヌスを配したのは、「悪魔の妖術師」ヘル・トリッパの登場を予告するためであると言ってよい。

ところで、サトゥルヌスは子供たちを食らった後どうなったのであろうか。この災難を免れたユピテルは、成長すると、サトゥルヌスに飲み込まれた子供たちを吐き出させる。サトゥルヌスと他のティタン神族はユピテルたちと戦うが、これに敗れ、タルタロスに幽閉される。このことから、我々はいかにパニユルジュが幻想を見ているかが分かる。サトゥルヌスはオーギュギエ島よりもタルタロス、つまりプロセルピナのおまろの真下、地獄の底を暗示しているのだ。従ってこの神の名は、次のエピソードに現れる土星の子のオカルト学者を予告しているだけでなく、ヘル・トリッパの占める象徴的空間をも指し示しているのである⁷⁾。

悪魔の巣窟

パニユルジュは悪魔にさらわれてしまう条件として三つ挙げている。それらは、まず、十字架金貨を持たないこと、次に借金皆済となること、最後に法衣とグロビス皮の頭巾をつけることである。反対に、悪魔にさらわれないためには、短剣を持つ必要がある。さて、これらのうち借金皆済になることについては、パニユルジュは既にその条件を満たしている。彼はパンタグリュエルによって借金を免除されているからだ。ここでは残りの条件として挙げられたものとヘル・トリッパへの贈物との関連に注目したい。パニユルジュはこのオカルト学者に「狼の皮で作った長

衣と、ビロウド張りの鞆に納めぴかぴかに金鍍金をした大きなバトルド刀一振りと、見事な天使貨幣五十枚」とを贈っている。パニユルジュは既に悪魔に対する剣の効用と聖ミカエルの像の刻まれた貨幣の効用については説明している。狼皮のローブはグロビス皮の法衣を思わせる。従ってこれらの間には何らかの関係があるに違いない。いずれにせよ、これらの贈物は、これらが全て地獄下りに関係ある以上、ヘル・トリッパの占める空間が象徴的な意味での「地獄」に相当することを特定している可能性がある。

実際パニユルジュは、ヘル・トリッパのことを「悪魔の魔法使い」或いは「反キリストの手品師」などと呼んでいる。このオカルト学者は、霊を呼び出して占うネクロマンシーまで提案する。ネクロマンシーはニグロマンシーとも書かれ、即ち黒魔術であると考えられていた。これは、数ある占いの中でも最も悪魔に近い、最悪の占いである。このことから、このオカルト学者の悪魔的性格がわかる。また、エピソードの最後でパニユルジュは、このオカルト学者のいる場所を「悪魔の巣窟」と形容する。これら全てが、ヘル・トリッパを悪魔と結びつける。

このエピソードに糞便と肛門に関する表現が頻出していることも忘れてはならない。例えば、パニユルジュはオカルト学者を「俺様のおけつに鼻をつっこむ時には、忘れずに眼鏡を外して置けよな」或いは「気違い犬め、悪魔に食われろ。どこかのアルバニア人におかまでもほられるがいいさ」と非難する。同様に、「糞食らえ」や「糞占い」のような言葉も見られる。最後にはパニユルジュは「悪魔狂言、幻術、魔法のきな臭い匂いに潰けられて、堪忍袋の緒が切れた」と怒る。糞便、臭気、ソドミーなどは、全て悪魔の持つイメージである。第一、ラブレア自身が地獄と糞便のイメージを明確に結びつけている。なぜなら、ラミナグロビスのエピソードにおいて、地獄の底は「地獄の女神プロセルピナのおまるの真すぐ下のところ、女神の浣腸器の霊験あらたかな黄金の御物が納められた紛うことなき地獄の壺のなか」と定義されているからだ。これらの理由から、ヘル・トリッパのエピソードを「プロセルピナのおまるの真下」即ち地獄の底と見なしてもよいのではないだろうか⁸⁾。

* * *

物語の最初の方で、パニユルジュは自らの浪費を正当化し、借金を礼讃する。ここで彼は既に「地獄下り」の途につこうとしている。サイコロを振って最初の占いを始める時、彼は異常なほどの好奇心を示す。この時、彼は地獄へ向かって大きく歩を進めるのだ。事物の隠された力や予知に引かれ、彼は悪魔の誘惑に屈してゆく。そしてついに彼は、自らの自己愛と好奇心のため、ヘル・トリッパのエピソードで地獄の底に至る。これが我々の考えるパニユルジュの「地獄下り」の概要だ。勿論、このトポスは象徴的な場であり、実際に彼が地獄下りをしているわけではない。この点、パニユルジュの「地獄下り」は極めて微妙である。パニユルジュ本人はおろか、読者さえも気づかぬうちに「地獄下り」は進行していくのだ。このような手法を用いることによってラブレアは、自己愛や好奇心の危険の微妙さを表すことに成功している。

では、仮に我々の結論が正しく、真にラブレアが自らの作品の下層に「地獄下り」の図式を隠

したとするならば、今後どのようなことが言えるのだろうか。まず第一に、この結論は、作品全体の整合性を示唆する。下層図式の存在は、ラブレーが極めて計画的に緻密な構成を準備していたことを意味するのだ。確かに我々の結論は、ラブレーが思いつくままに筆を進めたと考える評者たちにとっては、認め難いであろう。だが、近年、『第三の書』における対称構造の存在が論議されている事実にも見られる通り、この作品の整合性の問題はさらに追求されるべきであろう。第二に、我々の結論は、まさにその対称構造の問題に関わる。我々は既に、クレマン・マロの風刺詩『地獄』が対称構造を持つこと、そしてそれが『第三の書』に大きな影響を与えているのではないか、ということを目指してきた⁹⁾。すると、『第三の書』に見られる下層図式も、マロの詩の「刃獄、タルタロス、(極楽)」の図式を意識したものである可能性は高い。仮にこれが正しいとするならば、ラブレーの作品はウェルギリウス、ダンテ、マロと続く「地獄下り文学」の系譜の一端に位置づけられることになり、これは極めて興味深い問題である。また、その他にもラブレーとマロの作品の影響関係を探ることによって得られるものは、非常に大きいと予想される。それは『第三の書』の対称構造の存在証明にとどまらず、この作品の真の意味やラブレーの創作手法を解き明かす鍵となるであろう。第三に、我々は既に発表した論文の中で、この作品の中央部に男性器の図像が隠されていることを証明した¹⁰⁾。地獄と男性器とはどのような関係があるのか。これもまた、『第三の書』の根幹に関わる問題である。これらの問題に関しては、この小論文で扱うにはあまりに大きすぎるテーマであるため、別の機会に論じることとしたい。

注

* ラブレーの作品の引用には次の版を用いた。F. Rabelais, *Les Cinq Livres*, éd. J. Céard, G. Defaux, M. Simonin, Le Livre de Poche (« La Pochothèque »), 1994. 引用には、作品名 (TL とは『第三の書』を意味する)、章、上記校訂版における行数を付した。日本語訳は岩波文庫版の渡辺一夫のものを適宜参照した。また、聖書の引用には新共同訳を使用した。

- 1) 実際、『借金をしてはならぬこと』というエッセイにおいてプルタルコス、債務者の苦しみを地獄のタンタロスの苦しみに譬えている。ちなみに、借金礼讃を書く際にラブレーはこのテキストを参考にしたと考えられている。
- 2) Henri Clousot, « Deux Noëls cités par Rabelais », *Revue des Etudes Rabelaisiennes IV*, p.188-190.
- 3) ミハイール・バフチン著、川端香男里訳『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、東京、せりか書房、1980年(1940年)、p.332。G. Defauxの校訂した『ガルガンチュア』における『聖パトリックの洞穴』という言葉に関する注も参照せよ (Rabelais, *Les Cinq Livres*, p.20, n.7)。
- 4) Jean Bodin, *De la démonomanie des sorciers*, Paris, 1580 (Georg Olms Verlag, 1988), livre IV, ch.6.
- 5) 新共同訳では悪霊が人を聾啞とする能力を持つものとしてしか訳されていないが、実際には「surde et mute spiritus」という呼びかけからも明かなように、聾啞はこの悪霊自体の特質である。
- 6) J. Céard, Introduction au « Tiers Livre », Le Livre de Poche, 1995, p.XXI.
- 7) 中世の図像に現れるサトゥルヌスとサタンは、ほぼ同じ特徴を持っている。(Maxime Préaud, « Saturne, Satan, Wotan et saint Antoine ermite », *Les Cahiers de Fontenay*, 33, 1983, p.81-102. を見よ。) そもそも、双方が魔法使いや魔女を支配する神であり、このことからサトゥルヌスとサタンはほ

は同一視されることがあった。すると、土星の子ヘル・トリッパの会見の背後にも、サタンの力が働いていると見てよいだろう。恐らくラブレーはサトゥルヌスとサタンの間に見られる平行関係を自らの作品の構成に巧みに利用していると思われる。

- 8) ジャン・セアールは、ヘル・トリッパの会見について次のように述べている。「パニユルジュはこれほどまでに地獄の控えの間のような場所を訪れたのだと強く感じたことはなかった。」J. Céard, *La Nature et les Prodiges*, Genève, Droz, 1996, p.147.
- 9) H. Orii, « La structure symétrique dans *l'Enfer* de Clément Marot », 『仏文研究』 29, 京都大学フランス文学フランス語学研究会, 1998, p.13-32.
- 10) H. Orii, « Trois figures anamorphotiques de l'appareil génital dans le *Tiers Livre* de Rabelais », 『仏文研究』 30, 京都大学フランス文学フランス語学研究会, 1999, p.19-37.

[付記] 本稿は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。